

ソチオリンピックにおける新聞報道の分析

An Analysis of Japanese Newspaper Articles on the Sochi 2014 Winter Olympics

山 本 清 文

要約

オリンピックの新聞報道を競技別及び性別に分類し、掲載面積より捉えた研究は夏季オリンピックで一部あるのみで、冬季オリンピックにおける研究はない。そこで本研究は、ソチオリンピックにおける新聞報道の実態を明らかにし、その特徴を捉えることを目的とした。

- 1) 競技別の全記事面積（記事＋写真）の割合は、スケート競技が32105cm²（44%）と1番大きく、次いでスキー競技の30675cm²（42%）と2つの競技で高い割合を示した。
- 2) 性別の全記事面積の割合は、34100cm²（46%）と女性記事が高い割合を示した。
- 3) 競技別及び性別における全記事面積は、18995cm²でスキーの男子が最も高い値を示した。

An Analysis of Japanese Newspaper Articles on the Sochi 2014 Winter Olympics

The aim of this study is to clarify the actual situation of the press through the newspaper article size about the sport discipline and sex ratio on the Sochi 2014 Winter Olympics. As a result, the following findings were obtained.

1. In the newspaper article about the Sochi 2014 Winter Olympics, the skating

has accounted for 32105cm² (44%), the skiing has accounted 30675cm² (42%).

2. When we examined about sex ratio, the female article has accounted for 34100cm² (46%).

3. The newspaper article which occupied the biggest space was Men's skiing, 18,995cm².

I. 緒言

オリンピック競技大会（以下、OG）は世界最大の競技スポーツの祭典である。選手のみならず世界的な国と地域の大きな関心事でもある。選手たちは、これまでに積み重ねてきた時間の全てをこの一瞬に最高のパフォーマンスを行なうためにトレーニングを行ってきた。また、プレーそのものは大衆をひきつけ、その魅力に大衆性があり、二度と同じ内容が行われなく、常に新しいものを生み出すことができる。この瞬間の出来事が、スポーツの良さや素晴らしさ、様々な感動を人々に与えてきた。

我々はその情報を、新聞やテレビ、近年ではインターネットにおけるスポーツ報道によりそれを得ている。スポーツを扱う新聞記事は明治のなかば以降、1895年頃から増えてきたとされており、近年までにその情報量は増加している。その報道は様々であるが、記録、結果、話題、大会やイベントなどの内容、選手や関係者の談話、裏話や秘話、インタビューなどで構成されている。また、記事の掲載面積の大きさは、期待の高い選手や種目、結果などによりその量が決定されると考えられる。スポーツ報道の配信で最も歴史が古いのは新聞報道である。それにより、スポーツの広がりやスポーツの大衆化、スターやアイドルの輩出に貢献し、スポーツの関心を見出していると言っても過言ではない。スポーツの情報配信でもっとも注目されるスポーツイベントの一つはOGである。

これまでOGの新聞報道に関する研究は様々なされているが、その内容は、日本選手団に関する新聞報道の動向⁽¹⁾、報道のシステムにおける研究⁽²⁾⁽³⁾、ガバナンス⁽⁴⁾、ジェンダー⁽⁵⁾、選手の弱さや課題等⁽⁶⁾の研究である。また、冬季オリンピックにおける新聞報道の研究は少なく、OGにおける招致に関する新聞報道の検討⁽⁷⁾などの研

究があるのみである。新聞報道の面積と性別等の分析は夏季OGに一部あるものの、冬季OGにおける研究はほとんどないのが現状である。

そこで本研究は、ソチ冬季OGの新聞報道を通し、新聞紙面の掲載面積を、競技種目、性別に全記事面積、記事面積、写真面積を測定し、その特徴や掲載面積の実際を把握することを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

2. 1 調査対象

大会期間中の（2月7日〔金〕の開会式から2月25日〔火〕閉会式の翌日までの19日間）の主要1紙（日本で1番の出版部数、約1000万部以上を誇る読売新聞の日刊）を対象に、一面およびスポーツ面におけるオリンピック関連記事（コラムは除く）の紙面の面積を測定した。その内容は、競技及び種目別に全記事面（記事+写真）、記事全面、男性記事、女性記事、両性記事（男女混合種目、男女総合団体種目）、写真全面、男性写真、女性写真、両性写真（男女混合種目、男女総合団体種目）の面積をそれぞれ測定し分析した。

2. 2 分析方法

調査項目は、冬季OG7競技の、全記事面、記事全面、男性記事、女性記事、両性記事（男女混合種目、男女総合団体種目）と、写真全面、男性写真、女性写真、両性写真（男女混合種目、男女総合団体種目）に分類しそれぞれの面積を測定した。

① 競技内容

競技は、スキー、スケート、アイスホッケー、バイアスロン、ボブスレー、リュージュ、カーリングの全7競技を測定した。

② 競技と種目の分類

種目の分類は、アルペン、クロスカントリー、ジャンプ、ノルディック、フリースタイル、スノーボードの6種目がスキー競技であり、スピードスケート、フィギュアスケート、ショートトラックの3種目がスケート競技である。そし

て、リュージュとカーリングの2種目はボブスレー競技である。

③ 種目の分類

スキー競技のフリースタイル種目は、モーグル、ハーフパイプ、スロープスタイルで、スノーボード種目は、ハーフパイプ、スロープスタイル、パラレル回転・大回転、スノーボードクロスである。そして、フィギュアスケートは、シングル、ペア、アイスダンス、団体戦である。

2. 3 データの処理

データの処理は、Microsoft社のexcel 2010により項目ごとに、単純集計およびクロス集計を行なった。

Ⅲ. 結果

3. 1 日本選手の参加者数と男女の割合

日本選手の参加人数を見てみると、全出場選手は113名で、男子は48名(42%)で女子が65名(58%)であり、女子の参加人数のほうが多いことが分かった(図1)。

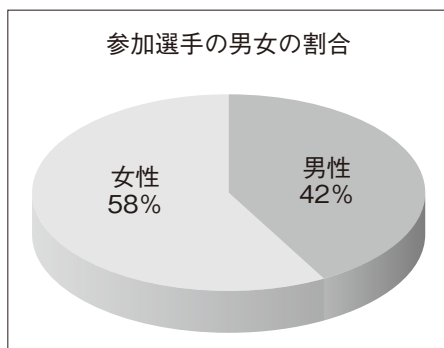


図1. 日本選手の参加者数と男女の割合

3. 2 日本の出場競技・種目と参加人数

今大会では7競技98種目が実施され日本選手の参加は、7競技(スキー、スケート、アイスホッケー、バイアスロン、ボブスレー、リュージュ、カーリング)で、種目は、スキー(アルペン[回転]、クロスカントリー[4×10kmリレー、スプリント、チームスプリント、パシュート、10km、30km]、ジャンプ[ノーマルヒル、ラージヒル、ラージヒル団体]、ノルディック複合ノーマルヒル、ラージヒル、ラージヒル団体]、フリースタイル[モーグル、ハーフパイプ、スロー

表1. 日本人出場競技・種目と参加人数

競 技	種 目	男子 選手数	女子 選手数	種 目	男子 出場者数	女子 出場者数	合計
1. スキー	(1) アルペン	2	0	回転	2		
	(2) クロスカントリー	5	1	4×10kmリレー	4		
				スプリント	1		
				チームスプリント	2		
				バシユート		1	1
				10km		1	1
				30km		1	1
	(3) ジャンプ	5	3	ノーマルヒル	4	3	3
				ラージヒル	4		
				ラージヒル団体	4		
	(4) ノルディック複合	5		ノーマルヒル	4		
				ラージヒル	4		
				ラージヒル団体	4		
	(5) フリースタイル	3	7	モーグル	2	4	4
				ハーフパイプ	1	2	2
				スロープスタイル		1	1
	(6) スノーボード	5	3	ハーフパイプ	4	1	1
				スロープスタイル	1		
				パラレル大回転		1	1
				パラレル回転		1	1
				スノーボードクロス		1	1
2. スケート	(1) スピードスケート	7	10	500m	4	3	3
				1000m	2	3	3
				1500m	1	4	4
				3000m		3	3
				5000m	1	5	5
				バシユート		4	4
	(2) フィギュアスケート	5	5	シングル	3	3	3
				ペア	1	1	1
				アイスダンス	1	1	1
				団体	4	4	4
	(3) ショートトラック	3	5	500m	1	3	3
				1000m	2	3	3
				1500m	3	3	3
				3000m		2	2
				3000mリレー		3	3
3. アイスホッケー	団体戦		21			21	21
4. バイアスロン		1	4	10kmスプリント	1		
				20km個人	1		
				15kmマスタート	1		
				7.5kmスプリント		4	4
				10kmバシユート		1	1
				15km個人		1	1
				4×6kmリレー		4	4
5. ボブスレー	(1) ボブスレー	6	1	2人乗り	2		
				4人乗り	4		
	(2) スケルトン	2	1		2	1	1
6. リュージュ		1		1人乗り	1		
7. カーリング			5	団体戦		5	5
合 計		48	65		64	99	99

※JOCホームページより筆者が作成

プスタイル]、スノーボード [ハーフパイプ、スロープスタイル、パラレル大回転、パラレル回転、スノーボードクロス]、スケート (スピードスケート [500m、1000m、1500m、3000m、5000m、パシュート]、フィギュアスケート [シングル、ペア、アイスダンス、団体]、ショートトラック [500m、1000m、1500m、3000m、3000mリレー])、アイスホッケー、バイアスロン (10kmスプリント、20km個人、15kmマスタート、7.5kmスプリント、10kmパシュート、15km個人、4×6kmリレー)、ボブスレー (ボブスレー [2人乗り、4人乗り]、スケルトン)、リュージュ (1人乗り)、カーリングの男女合わせて60種目の参加であった (表1)。

3. 3 競技別の男女の参加人数と割合

男女の参加人数と割合を競技別にみると、スキーは男子25名 (64%) で、女子14名 (36%) の計39名であった。スケートは男子15名 (43%) で、女子20名 (57%) の計35名であった。ホッケーは男子0名 (43%) で、女子21名 (100%) の計21名であった。ボブスレーは男子6名 (86%) で、女子1名 (14%) の計7名であった。リュージュは男子1名 (100%) で、女子0名 (0%) の計1名であった。カーリングは男子0名 (0%) で、女子5名 (100%) 合の計5名であった。バイアスロンは男子1名 (20%) で、女子4名 (80%) の計5名であった。

男子は、7競技の中でスキー、ボブスレー、リュージュの3競技において女子より多い参加人数を示しており、女子は、スケート、アイスホッケー、カーリング、バイアスロンの4競技において男子より多い参加人数であることが分かった。また、男子は、アイスホッケーとカーリングにおいて出場権を獲得できなかったため7競技中、5競技の参加であった。アイスホッケーとカーリングの競技は団体戦で、2つの競技を合わせると26人の参加となるため、参加人数で表すと大きな差が出る。特に、ホッケーにおいては21人と1つの競技の中でも参加者数は多いことが分かる。(表2)。

表2. 競技別の男女の参加人数と割合

競技・種目	選手					
	男子		女子		小計	
	(n)	(%)	(n)	(%)	(n)	(%)
1. スキー	25	64%	14	36%	39	(100%)
2. スケート	15	43%	20	57%	35	(100%)
3. アイスホッケー	－	－	21	100%	21	(100%)
4. ボブスレー	6	86%	1	14%	7	(100%)
5. リュージュ	1	100%	0	0%	1	(100%)
6. カーリング	－	－	5	100%	5	(100%)
7. バイアスロン	1	20%	4	80%	5	(100%)
合 計	48	42%	65	58%	113	(100%)

※—は出場権を獲得できなかった競技・種別。

3. 4 メダル獲得の競技・種目の特徴と課題

日本代表選手のメダル獲得数は、金1、銀4、が3の計8個で、入賞総数は28となった。メダル獲得数、入賞数ともに、長野や札幌の自国開催を除き、国外開催の冬季オリンピックでは過去最多の成績を収めた。入賞数も27が最高であったが、それを1つ上回って28の入賞数を獲得した。

ソチOGのメダル獲得数と成績を見てみると、優勝は、スケートの1競技のみで、フィギュアスケート種目であった。2位、3位については、スキー競技のみであった。その中でも従来の伝統種目であるスキー競技のジャンプ・ラージヒル種目の個人で銀、団体が銅、ノルディク複合ノーマルヒル種目の個人が銀という3つのメダルの獲得であった。その他4つのメダルは、長野オリンピック以降にできた新種目である。フリースタイル・ハーフパイプが銅、スノーボード・ハーフパイプが銀・銅、スノーボード・パラレル大回転が銀と2人が銀、2人が銅とそれぞれメダルを獲得した。8個のメダルのうち4個が伝統的種目であり、残り4個が新種目という特徴が伺えた。しかし、今回は、国外開催の冬季オリンピックでは過去最多の成績を収めたと単に喜んでもいられない現状は、種目数が増加しているにもかかわらず8個のメダルに喜んでいてよい状況であるものかと考えざるを得ない。本来伝統的なこれまで好成績を収めてきたスピードスケートに関

しては1つのメダルもない。スケート種目も選手層が厚い割には結果を残すことができなかった。実際、オランダの強さには全く歯が立たなかった実情から、伝統的種目の強化の必要性和新種目であるが故の今後の強化策が課題になると考えられる（表3）。

表3. 競技・種目とメダリストとメダル数

成績	競技・種目	種目	選手名	合計
優勝	スケート・フィギュアスケート	男子シングル	羽生 結弦	1
2 位	スキー・ジャンプ	男子ラージヒル個人	葛西 紀明	4
	スキー・ノルディック複合	ノーマルヒル個人	渡部 暁斗	
	スキー・スノーボード	男子ハーフパイプ	平野 歩夢	
	スキー・スノーボード	女子パラレル大回転	竹内 智香	
3 位	スキー・ジャンプ	男子ラージヒル団体	清水 礼留飛	3
			竹内 択	
			伊東 大貴	
			葛西 紀明	
	スキー・フリースタイル	女子ハーフパイプ	小野塚 彩那	
	スキー・スノーボード	男子ハーフパイプ	平岡 卓	

3. 5 日程と紙面数

新聞紙面数は19日間通して、78面であった。一面の掲載が16日間あり、スポー

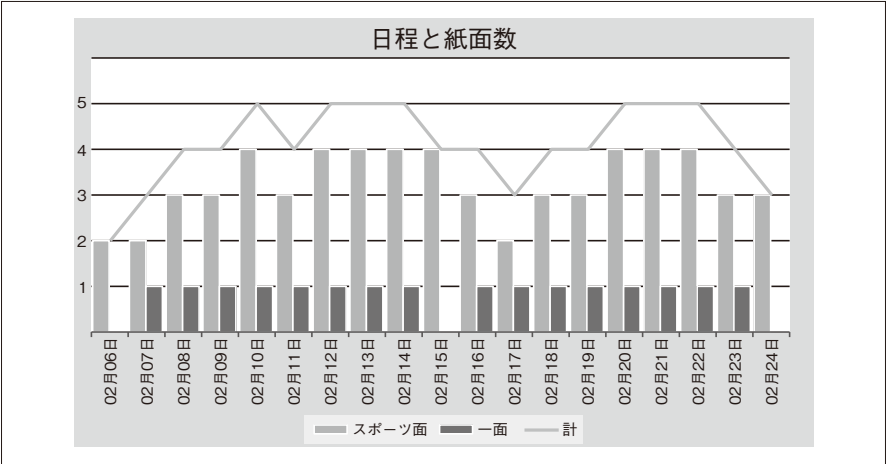


図2. 日程と紙面数

ツ面掲載は62面であった。1日当たりの紙面数は、最少2面であり、最大は5面で、平均すると1日当たり4.1面であった。最大紙面数が5面の日は、全体の7日間であった（図2）。

3. 6 競技別の全記事面積と割合

図3は全記事面積に対する割合を競技別に示したものである。競技別にスキー、スケート、ホッケー、バイアスロン、ボブスレー、リュージュ、カーリングの順に見てみると、スキーが30675cm²（42%）、スケート32105cm²（44%）、ホッケー4713cm²（6%）、バイアスロン65cm²（0%）、ボブスレー540cm²（1%）、リュージュ14cm²（1%）、カーリング5077cm²（7%）であった。次に、記事面積が大きく掲載されている競技を見てみると、スケート32117cm²（44%）で1番大きく、2番目に大きい競技はスキーが30675cm²（42%）、この2つの競技を合わせると約全体の86%であった。スケートの面積がやや大きいものの、スキーとの差が2%とほぼ同じくらいの面積であり、他の競技と比べ大半が2競技の記事であることがわかった。この結果、2つの競技ともに関心の高い競技種目であるが、スキーの種目はアルペン、クロスカントリー、ジャンプ、ノルディック、フリースタイル、スノーボードの6競技25種目、一方のスケートではスピードスケート、フィギュアスケート、ショートトラックの3競技26種目と、種目数はほぼ同数に近い。

この種目数からみても、スキー競技とスケート競技の記事面積がほぼ同じくらいであることが考えられる。

次に、スケートとスキーにはかなり差はあるもののカーリング5077cm²（7%）とホッケー4713cm²（6%）が3番目と4番目であった。2競技とも単一競技という

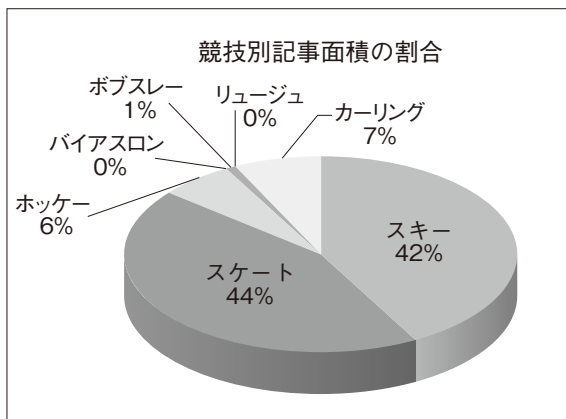


図3. 競技別の全記事面積の割合

ことから考えると、この面積は決して小さいとは言えないことが分かった（図3）。

3. 7 競技別男性記事と写真および全男性記事面積（写真＋記事）と割合

競技別に男性記事と写真および全男性記事の割合を見てみると、スキーマの男性記事面積は13555cm²（59%）で、写真面積は5440cm²（55%）、全男性記事面積は18995cm²（58%）、スケートの男性記事面積は8237cm²（36%）で、写真面積は3996cm²（40%）、全男性記事の面積は12233cm²（37%）、ホッケーの男性記事面積は584cm²（3%）で、写真面積は396cm²（4%）、全男性記事面積は980cm²（3%）、バイアスロンの男性記事面積は36cm²（0%）で、写真面積は0cm²（0%）、全男性記事面積は全体の36cm²（0%）、ボブスレーの男性記事面積は272cm²（1%）で、写真面積は36cm²（0%）、全男性記事面積は308cm²（1%）、リュージュの男性記事面積は14cm²（0%）で、写真面積は0cm²（0%）、全男性記事面積は14cm²（0%）、カーリングの男性記事面積は131cm²（1%）で、写真面積は52cm²（1%）、全男性記事面積は183cm²（1%）、全ての競技の男性全記事面積は22829cm²で、写真面積は9920cm²、全男性記事の面積は32749cm²であった。

次に、掲載の大きな競技を男性記事、男性写真、全男性記事の順でみてみると、スキーマの男性記事面積は13555cm²（59%）で、写真面積は5440cm²（55%）、全男性記事の面積は18995cm²（58%）で、スキー競技が約6割弱と全ての面積において最も多くの掲載があることが分かった。

面積と割合の大きいスキーとスケートの両方で男性記事のみをみてみると、スキーとスケートの両方で95%の割合で大きな記事面積を獲得しており、この2競技で男性記事の大半を占めていることがわかる。次いで、男性写真でみてみると、男性記事と同様の95%であった。

男性は、この2競技の掲載面積がほとんどであることが分かった。

この掲載面積を、メダルの獲得と成績の結果からみると、メダル獲得はスキーとスケートのみである。男性のメダル獲得は6個で、うちスケートは金メダル1個、スキー種目では金メダルはいないものの、銀と銅メダルは4名と1団体で5つのメダルを獲得している。この期待度と結果の両方が記事の掲載面積を大きく

しているものと考えられる。

男性写真については、7競技全てにおいて記事面積の大小にかかわらず掲載はあるが、バイアスロンとボブスレー、リュージュの3競技において写真の掲載はなかった（表4）。

表4. 競技別男性記事と写真および全男性記事の割合

競 技	男性記事		男性写真		男性記事+写真	
	(cm ²)	(%)	(cm ²)	(%)	(cm ²)	(%)
スキー	13555	59%	5440	55%	18995	58%
スケート	8237	36%	3996	40%	12233	37%
ホッケー	584	3%	396	4%	980	3%
バイアスロン	36	0%	0	0%	36	0%
ボブスレー	272	1%	36	0%	308	1%
リュージュ	14	0%	0	0%	14	0%
カーリング	131	1%	52	1%	183	1%
合 計	22829	100%	9920	100%	32749	100%

3. 8 競技別女性記事と写真および全女性記事（写真+記事）の割合

競技別に女性記事と写真および全女性記事の割合を見てみると、スキーの女性記事面積は6911cm²（30％）で、写真面積は3852cm²（34％）、全女性記事面積は10763cm²（32％）、スケートの女性記事面積は9722cm²（43％）で、写真面積3963cm²（35％）、全女性記事面積は13685cm²（40％）、ホッケーの女性記事面積は2861cm²（13％）で、写真面積は872cm²（8％）、全女性記事面積は3733cm²（11％）、バイアスロンの女性記事面積は0cm²（0％）で、写真面積は29cm²（0％）、全女性記事面積は全体の29cm²（0％）、ボブスレーの女性記事面積は204cm²（1％）で、写真面積は28cm²（0％）、全女性記事面積は232cm²（1％）、リュージュの女性記事面積は0cm²（0％）で、写真面積は0cm²（0％）、全女性記事面積は0cm²（0％）、カーリングの女性記事面積は3102cm²（14％）で、写真面積は2556cm²（23％）、全女性記事面積は5658cm²（17％）、全ての競技の女性記事面積は22800cm²で、写真面積は11300cm²、全女性記事面積は34100cm²であった。

次に、掲載の大きな競技を女性記事、女性写真、全女性記事をみてみると、女

性記事面積は9722cm²（43%）で、写真面積3963cm²（35%）、全女性記事の面積は13685cm²（40%）と女性記事、女性写真、全女性記事ともにスケートの掲載面積が1番大きいことが分かった。次いで、2番目は女性記事面積6911cm²（30%）で、写真面積は3852cm²（34%）、全女性記事面積は10763cm²（32%）とすべてにおいてスキーであった。これらの2つの競技を合わせると、女性記事の割合は73%、女性写真は69%、全女性記事72%と3つを平均すると71%であった。

また、女性記事では、スケートの掲載が最も大きいですが、女性写真においてはスキーがスケートとほぼ同じ写真面積であった。この女性写真だけ、スケートの面積がほぼ同じ割合であることは、スキー競技の成績によるもの大きいと考えられる。女性の競技種目全体でみるとメダル数は2個である。獲得した競技種目はスキーである。その内訳は、フリースタイル・ハーフパイプの銅メダルとスノーボード大回転の銀メダルで、2名が獲得している。メダルを獲得しても、メダルを獲得していないスケートの記事の方が全てにおいて上回っていることは、スキーよりスケート種目の関心が高かったことが考えられる。

リュージュに関しては女性の参加は行なわれていないのと競技種目の日本における認知度、関心度、競技もマイナーイメージも拭いきれないと考えられる。

また、上記2競技の掲載面積とはかけ離れているものの、カーリングの女性記事面積は3102cm²（14%）、写真面積2556cm²（23%）、全女性記事面積は5658cm²（17%）であり、ホッケーの女性記事面積は2861cm²（13%）、写真面積872cm²（8%）、全女性記事面積では3733cm²（11%）であった。両競技ともに団体競技で単一競技であるのに対し、スキーは21種目、スケートは15種目に参加していることから、この2競技の掲載面積は小さくはないと考えられる。また、ホッケー女子は初出場でありスマイルジャパンの愛称で応援され、カーリングにおいては2010年のバンクーバー前よりカーリング娘やクリスタルジャパンの愛称で親しまれている。掲載面積からみても、関心度が高まりつつある競技であると考えられる（表5）。

表5. 競技別と女性記事と写真の割合

競 技	女性記事		女性写真		女性記事+写真	
	(cm ²)	(%)	(cm ²)	(%)	(cm ²)	(%)
スキー	6911	30%	3852	34%	10763	32%
スケート	9722	43%	3963	35%	13685	40%
ホッケー	2861	13%	872	8%	3733	11%
バイアスロン	0	0%	29	0%	29	0%
ボブスレー	204	1%	28	0%	232	1%
リュージュ	0	0%	0	0%	0	0%
カーリング	3102	14%	2556	23%	5658	17%
合 計	22800	100%	11300	100%	34100	100%

3. 9 競技別両性記事と写真の割合

競技別に両性記事と写真および全両性記事の割合を見てみると、スキーの両性記事面積は917cm²（13%）で、写真面積は0 cm²（0%）、全女性記事面積は917cm²（12%）、スケートの両性記事面積は5892cm²（82%）で、写真面積307cm²（100%）、全両性記事面積は6199cm²（83%）、ホッケーの両性記事面積は0 cm²（0%）で、写真面積は0 cm²（0%）、全両性記事面積は0 cm²（0%）、バイアスロンの両性記事面積は0 cm²（0%）で、写真面積は0 cm²（0%）、全両性記事面積は全体の0 cm²（0%）、ボブスレーの両性記事面積は0 cm²（0%）で、写真面積は0 cm²（0%）、全両性記事面積は0 cm²（0%）、リュージュの両性記事面積は0 cm²（0%）で、写真面積は0 cm²（0%）、全両女性記事面積は0 cm²（0%）、カーリングの両性記事面積は382cm²（5%）で、写真面積は0 cm²（0%）、全両性記事面積は382cm²（5%）、全ての競技の両性全記事面積は7191cm²で、写真面積は307cm²、全両性記事面積は7498cm²であった。

次に、掲載の大きな競技を両性記事、両性写真、全両性記事の順でみてみると、両性記事面積5892cm²（82%）、両性写真307cm²（100%）、両性記事の面積6199cm²（83%）とスケート競技は両性記事、両性写真、両女性記事ともに一番掲載面積が大きく、掲載面積の割合を平均すると約88%であることが分かった。次いで、スキーの両性記事面積は917cm²（13%）で、写真面積0 cm²（0%）、全両性記事面

積は917cm²（12％）であった。スケートはスキースターの両性記事面積と全両性記事面積では6倍強であった。スキー種目には男女混合の競技はないため、両性記事に関する掲載面積がスケートほどの掲載には至らないと考えられる。また、スケートでは、羽生結弦選手、高橋大輔選手、浅田真央選手を中心に初めての団体種目の関心度と、ペア種目、アイスダンス種目などの男女混合種目も多いため、全ての記事において一番多くの掲載があったと考えられる。

表 6. 競技別両性記事と写真の割合

競 技	両性記事		両性写真		両性の記事 + 写真	
	(cm ²)	(%)	(cm ²)	(%)	(cm ²)	(%)
スキー	917	13%	0	0%	917	12%
スケート	5892	82%	307	100%	6199	83%
ホッケー	0	0%	0	0%	0	0%
バイアスロン	0	0%	0	0%	0	0%
ボブスレー	0	0%	0	0%	0	0%
リュージュ	0	0%	0	0%	0	0%
カーリング	382	5%	0	0%	382	5%
合 計	7191	100%	307	100%	7498	100%

3. 10 性別の全記事面積（記事 + 写真）と割合

全男性記事面積と全女性記事面積、全両性の記事面積と割合をみると、全ての競技をあわせた全男性記事は32749cm²（44％）、全女性記事34100cm²（46％）、全両性記事7498cm²（10％）、合計で74347cm²（100％）であった。

全記事面積が大きい順にみると、全女性記事34100cm²で全体の46％と掲載面積が1番大きく、次いで、全男性記事は32749cm²で全体の44％、全両性記事面積は7498cm²で全体の10％であった。全女性記事は全男性記事より2％大きく、ほぼ同じわりあいであった。成績

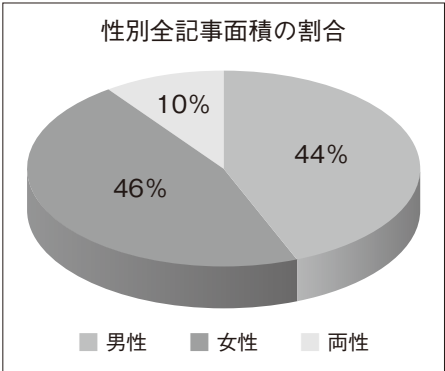


図 4. 性別の全記事面積と割合

から捉えると、男性のメダル獲得者数のほうが女性よりも3倍多いが全記事面積はわずかに女性が上回った。メダル獲得が直接紙面の獲得には繋がらないということが考えられる（図4）。

3. 11 性別の記事面積と割合

全ての競技をあわせた男性記事面積と女性記事面積、両性の記事面積と割合をみると、男性記事は22829cm²（43%）、女性記事22800cm²（43%）、両性記事7191cm²（14%）、合計で52820cm²（100%）であった。男性記事は女性記事とほぼ同じぐらいの面積で、割合にすると43%と同じであった。

出場者は男性48名と女性65名で、そのうち女子ホッケー競技は21名の団体競技なので出場者当たりの人数は男女ほぼ同じであると考えられ、出場種目数は女性の方が多い。

この割合を成績とくにメダルの数から捉えると、男性の記事の割合が大きくなることは十分に考えられるが、記事のみの面積は同じくらいであることから、女性に対する話題や期待の高さの表れではないかと考えられる（図5）。

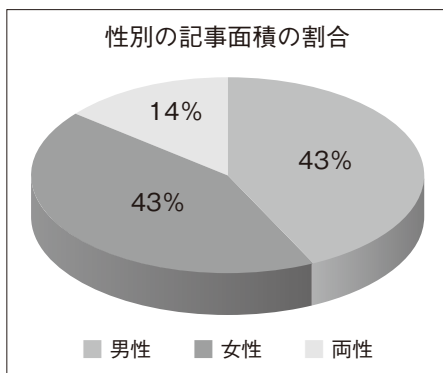


図5. 性別記事全体の割合

3. 12 性別写真全体の割合

スキー、スケート、ホッケー、バイアスロン、ボブスレー、リュージュ、カーリングにおける性別の写真面積と割合を見てみると、男性写真9920cm²（46%）、女性写真11300cm²（53%）、両性写真307cm²（1%）、写真面積21527cm²（100%）であった。女性写真面積の割合は53%で1番大きく、次いで男性写真面積46%で、男女の両方で99%であった。両性写真はわずか1%であった。成績からみると、女性より男性の写真面積の方が大きいと一般的には考えられるが、7%の割合で女性の写真面積が大きかった。全7競技中女性が出場していない競技は、リュージュ

ジュのみであり、それ以外の6競技には出場している。また、女子のみが出場している競技は、ホッケーとカーリングがある。スキーマダルの獲得やスケートの入賞者は勿論のこと、ホッケーは女子の8位決定戦で日本はドイツに2－3で敗れ、5戦全敗で最下位に終わったが8位入賞で、カーリングも通算4勝5敗で5位にとどまり準決勝進出を逃したが、日本の5位は1998年長野冬季五輪と並ぶ最高の成績となった。話題性を集めていた競技だけに、その影響力は強かったと考えられる。男性は、7競技中5競技のみの出場となっているため、女性の写真面積の方が大きいと考えられる（図6）。

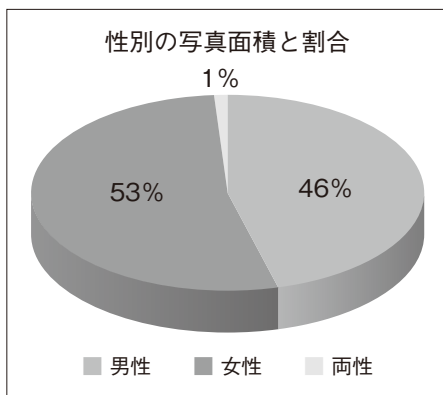


図6. 性別写真全体の割合

3. 13 競技別における性別の全記事面積と割合

スキー、スケート、ホッケー、バイアスロン、ボブスレー、リュージュ、カーリングの順に競技別における性別の全記事面積と割合を見てみると、スキーは男性記事18995cm²（62%）、女性記事10763cm²（35%）、両性記事917cm²（3%）、全記事面積は30675cm²（100%）であった。男性記事は18995cm²（62%）と1番大きく、女性記事は10763cm²（35%）と2番目であった。記事全面積では、全ての競技で2番目に大きかった。

スケートは男性記事12233cm²（38%）、女性記事13685cm²（43%）、両性記事6199cm²（19%）、全記事面積32117cm²（100%）であった。女性記事が13685cm²（43%）と1番大きく、わずかであるが男性記事12233cm²（38%）より大きかった。両性記事も6199cm²（19%）と全競技の中では1番大きかった。両性記事では、従来のペア、アイスダンス種目のほか、団体戦はソチOGからできた新種目であり、特に期待される種目でもあるため高い割合を示したと考えられる。

ホッケーは男性記事980cm²（21%）、女性記事3733cm²（79%）、両性記事0cm²

(0%)、全記事面積4713cm² (100%)であった。女性のみの出場であり、女性記事ではカーリングに次いで4番目の記事面積であったことは、1998年長野五輪以来(開催国枠で出場)16年目の出場という期待感の表れであったと考えられる。

バイアスロンは男性記事36cm² (55%)、女性記事29cm² (45%)、両性記事0cm² (0%)、全記事面積65cm² (100%)と全体的に面積は少なく、男性記事のみで6番目の掲載面積であった。

ボブスレーは男性記事308cm² (57%)、女性記事232cm² (43%)、両性記事0cm² (0%)、全記事面積540cm² (100%)であった。掲載面積は少ないものの男女ともにほぼ同じぐらいの面積で5番目であった。

リュージュは男性記事14cm² (100%)、女性記事0cm² (0%)、両性記事0cm² (0%)、全記事面積14cm² (100%)と男性のみの掲載で7番目あった。

カーリングは男性記事183cm² (3%)、女性記事5658cm² (91%)、両性記事382cm² (6%)、全記事面積6223cm² (100%)と女性記事の面積が大きいことがわかった。この種目の男子は出場権の獲得を逃し、女子のみの参加であった。カーリングは、女性記事ではスキーに次いで3番目であり、単一競技のため掲載面は小さいとは言えないことが分かった(図7)。

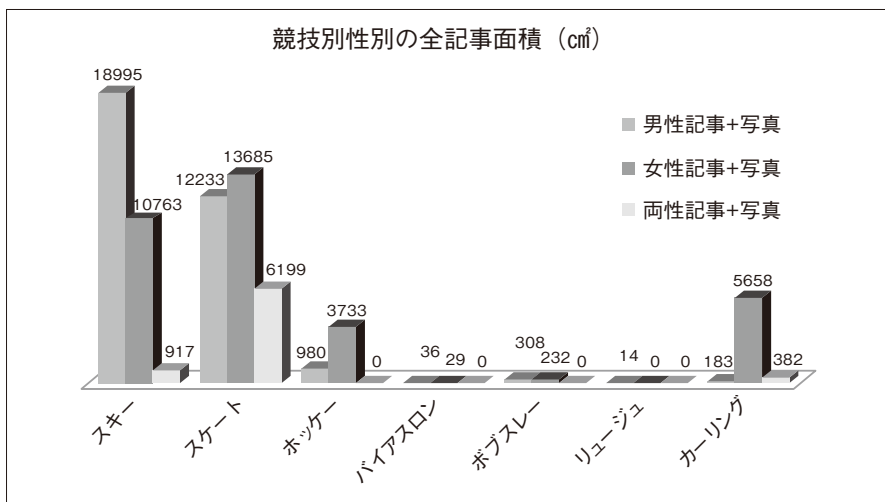


図7. 競技別における性別の全記事面積と割合

3. 14 競技別における性別の記事面積と割合

スキー、スケート、ホッケー、バイアスロン、ボブスレー、リュージュ、カーリングの順に競技別における性別の記事面積と割合を見てみると、スキーは男性記事13555cm²（63%）、女性記事6911cm²（32%）、両性記事917cm²（4%）、全記事面積は21383cm²（100%）で、男性記事13555cm²（63%）が1番大きく、女性記事は6911cm²（32%）と2番目の大きさであったが男性記事の約半分であった。記事面積では、全ての競技で2番目に大きかった。

スケートは男性記事8237cm²（35%）、女性記事9922cm²（41%）、両性記事5892cm²（25%）、全記事面積23851cm²（100%）で、スケートでは女性記事が女性記事9922cm²（41%）と一番大きく、男性記事8237cm²（35%）とやや女性を下回った。両性記事5892cm²（25%）では、ペア、アイスダンス、団体戦など混合種目があり、特に団体戦はソチOGからできた新種目であり、スケートは期待種目でもあるため高い割合を示したと考えられる。

ホッケーは男性記事584cm²（17%）、女性記事2861cm²（83%）、両性記事0cm²（0%）、全記事面積3445cm²（100%）であった。この男女の記事面積の大きさの差は、日本は女子のみの出場であり、男子は出場権の獲得ができなかったため、女性記事面積が大半を占めたと考えられる。また、日本の女子は、前回の五輪出場が開催国枠で出場した1998年長野五輪以来16年目の出場という期待感の表れもあるのではないかと考えられる。バイアスロンは男性記事36cm²（100%）、女性記事0cm²（0%）、両性記事0cm²（0%）、全記事面積36cm²（100%）と全体的に面積は少なく、男性記事のみであった。ボブスレーは男性記事272cm²（57%）、女性記事204cm²（43%）、両性記事0cm²（0%）、全記事面積476cm²（100%）であった。掲載面積は少ないもののわずかに男性記事のほうが大きかった。リュージュは男性記事14cm²（100%）、女性記事0cm²（0%）、両性記事0cm²（0%）、全記事面積14cm²（100%）と男性のみの掲載であった。この競技に参加した日本人は一人のみで1種目であった。カーリングは男性記事131cm²（4%）、女性記事3102cm²（86%）、両性記事382cm²（11%）、全記事面積3615cm²（100%）と女性記事が大半を占めていることがわかった。カーリングは、単一競技のため掲載面は小さいと

は言えないことが分かった（図8）。

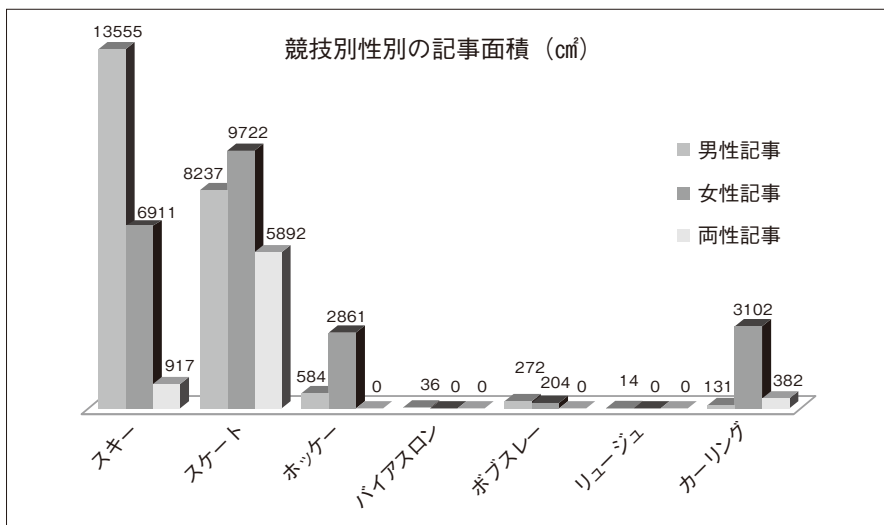


図8. 競技別における性別の記事面積と割合

3. 15 競技別における性別の写真面積と割合

スキー、スケート、ホッケー、バイアスロン、ボブスレー、リュージュ、カーリングの順に競技別における性別の写真面積と割合を見てみると、スキーは男性写真5440cm²（59%）、女性写真3852cm²（41%）、両性写真0cm²（0%）、全写真面積9292cm²（100%）で、男性写真が最も大きく1番であった。競技別では、全ての競技でも1番大きいことが分かった。女性写真では、わずかであるがスケートについて2番目であった。スキーはメダルの期待と獲得数が一番多い競技であったことから、写真面積が大きいと考えられる。

スケートは、男性写真3996cm²（48%）、女性写真3963cm²（48%）、両性写真307cm²（4%）、全写真面積8266cm²（100%）で、男女の写真面積が男性写真3996cm²（48%）、女性写真3963cm²（48%）で、ほぼおなじ面積であった。男女ともに関心の高さと結果が伺える。両性写真は100%で、前述の記事同様、ペア、アイスダンス、団体戦など混合種目が多くあると考えられる。また、写真面積はスキーに次いで2番目であった。

ホッケーは、男性写真396cm²（31％）が女性写真872cm²（69％）、両性写真0cm²（0％）、全写真面積1268cm²（100％）と、女性写真のほうが男性写真の2倍以上の写真面積がであった。日本選手は女子のみの参加であったが、競技別および女性写真の両方ともにスキー、スケート、カーリングに次いで4番目であった。単一競技での写真面積は小さいとは言えないことが分かった。バイアスロンの男性写真は0cm²（0％）で、女性写真29cm²（100％）両性写真0cm²（0％）、全写真面積29cm²（100％）と写真面積は小さく、女性のみの掲載であった。

ボブスレー男性写真36cm²（56％）、女性写真28cm²（44％）、両性写真0cm²（0％）、全写真面積64cm²（100％）とボブスレー種目は男子2人乗り、4人乗り、スケルトンは男女ともに参加はしているものの、男女ともに掲載面積は小さい。

リュージュ男性写真0cm²（0％）、女性写真0cm²（0％）、両性写真0cm²（0％）、全写真面積0cm²（0％）と写真の掲載は無かった。日本人の参加は、男性が1人乗りにより1人の参加であった。

カーリングは、男性写真52cm²（2％）女性写真2556cm²（98％）両性写真0cm²（0％）全写真面積2608cm²（100％）と女性の写真面積がほとんどであった。競技別にみると、スキー、スケートに次いで3番目の写真面積の大きさであった（図9）。

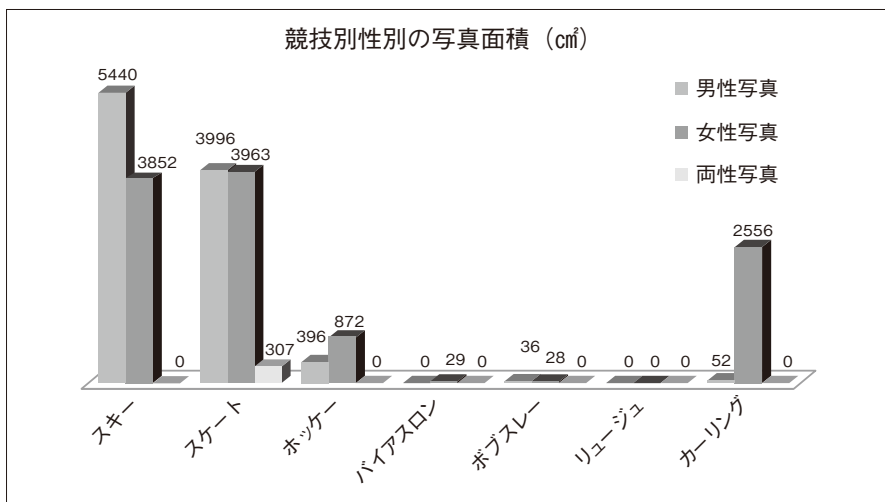


図9. 競技別における性別の写真面積と割合

IV. 考察

ソチオリンピックの期待や話題、成績を見てみると、スキーとスケートの2競技における面積と割合は、話題性および結果に繋がっていると考えられる。

スケートは、男子シングルに羽生結弦選手が金メダルを日本で唯一獲得し、メダルは取れなかったものの男子は、町田樹選手5位、高橋大輔選手6位と3人全員が入賞し、全体では、浅田真央選手6位、鈴木明子選手8位入賞と6人中5人が入賞している。フィギュアスケートはスター選手が多くいることでメダルの数より話題性に富んでおり、団体戦もソチOGからの新種目になったこともこの結果に拍車をかけたと考えられる。特に、浅田真央選手は前回の銀メダルで、今回は金メダルの期待をされていたが、16位に終わった失意のショートプログラムから一転、フリーで見せた最高の演技で、日本のみならず世界の人々に感動を与え、記録より記憶にのこる選手として世界に賞賛された。ソチオリンピック期間中、大会について言及されたツイート数は約3800万。更に選手ごとに個別の統計も行われており、浅田選手が全選手中1位に輝いていた。ソチオリンピックの期間中、ツイート上で最も話題になった選手であった。また、ソチ五輪期間中、世界で最もツイッターで話題になった選手はフィギュアスケートの浅田真央選手だった。ツイッター社が五輪に関する4千万件のツイートを分析して発表したことでも話題になり、この感動は新聞紙面でも大きく取り上げられたことは周知の事実である。浅田選手のみではないが、スケートへの関心や話題性は日本にとってかなりの大きいと考えられる。また、団体競技が新種目として話題をさらい、両性の全記事面積に拍車をかけたと考えられる。男女人気に、両性記事が増えたことによるところが1番大きな理由と考えられる。

スキーは、ソチ冬季五輪のノルディックスキー複合個人ノーマルヒルで銀メダルを獲得した25歳の渡部暁斗が銀メダルを獲得し、複合の日本勢5大会ぶりのメダルを獲得した。また、団体も5位入賞を果たした。ジャンプは、女子ジャンプは新種目であり、高梨沙羅選手はオリンピック前までは13戦10勝で、すべて3位以内と好調であり金メダルの期待が高かったものの、結果は4位と惜しいところでメダルを逃した。前評判では、メダルは確実と呼び声があったほど期待は高

かった。また、スキー・ジャンプ男子ラージヒルでは、葛西紀明は41歳8カ月に
して銀メダルを獲得した。そして、引き続き団体においても銅メダルを獲得し、
世界のスキー仲間からレジェンドという呼び名をもらい、日本のみならずスキー
の選手同士の中でも尊敬されていた葛西選手は話題とともに結果も残した。

初めての種目でメダリストは、最年少記録も持つ、スキー・スノーボード男
子ハーフパイプ平野 歩夢15歳が銀メダル、平岡 卓18歳が銅メダルと若年選手の
同種目が話題となり、女性では、スキー・スノーボード女子パラレル大回転で竹
内 智香が銀メダルで、今大会は、スノーボード種目に対する認知度や種目の理
解度などの反響があったといえる。また、スキー・フリースタイル女子ハーフパ
イプで小野塚 彩那が銅メダルを獲得した。長野オリンピック以降の新種目で8
個中4個のメダルを獲得し、3種目において初のメダルを獲得したことによる話題
性も大きいと考えられる。

競技別記事の記事面積と性別の記事面積、競技別と性別の全記事面積から総合
的に特徴を捉えると、全記事面積ではスケートが44%と1番大きく、次いでス
キーが42%と2競技だけで86%の割合を示し、約二分していることがわかる。ま
た、男女ともに同じ傾向を示していることが分かった。スケートとスキーが二分
していると思われる理由は、スケートはメダルが金1個であるが、男女合わせて
6人中5人が8位入賞しており、話題や期待も大きく、男女ともに人気がありス
ター揃いである。スピードスケートは、期待の選手もいたが結果としてオランダ
に惨敗を期した。ショートトラックにおいては、メダルを狙った女子3000メート
ルリレーの5位が最高で、個人種目では、男子500メートルが準決勝に進んだの
が最高成績であり、一人も決勝には進めなかった。これらの結果をみても、フィ
ギュアシングルのレベルの高さが、スケートの面積を押し上げていると考えられ
る。また、団体競技や男女混合競技があるため、両性記事も面積の大きさを押し
上げていると考えられる。

性別における記事全面は46%とスキーの男性が1番大きく、この理由は今大会
のメダル獲得数8個のうち5個を男性が獲得している。スキー全体では金メダル
はないものの、8個中7個のメダルを獲得していることによる理由が大きいと考

えられる。女子スキーマの面積も小さくはないが、スキーには男女混合競技がないところにその差があったことがわかった。両性を抜いた男女の面積だけで見ると、スケートよりスキーの方の全記事面積が大きいことがわかった。今後、ジャンプ種目の男女団体戦などの種目が増えれば、その差は逆転する可能性があると考えられる。女子のカーリングとホッケーは、単一競技であることを考えると面積は小さくなく、話題や関心が大きいことが分かった。

V. 結語

1. 競技別記事の記事面積の特徴を見ると

- ①全記事面積は、スケート競技が32117cm²（44%）と1番大きく、次いでスキー競技の30675cm²（42%）と全体の86%をしめる割合であった。
- ②男性の全記事面積は、スキーが18995cm²（58%）最も大きい割合を示した。
- ③女性の全記事面積は、スケートが13685cm²（40%）と最も大きい割合を示した。
- ④両性の全記事面積は、スケートの6199（83%）が大半を占めた。

2. 性別の記事面積の特徴を見ると

- ①性別の全記事面積は、女性の記事面積が全女性記事34100cm²（46%）と最も大きい割合を示した。
- ②性別の記事面積は、男性記事は22829cm²（43%）、女性記事22800cm²（43%）と男女共に43%と同じ割合を示した。
- ③性別の写真面積は、女性の写真面積が11300cm²（53%）と最も大きい割合を示した。

3. 競技別性別の全記事面積の特徴

- ①競技別性別の全記事面積と割合は、18995cm²（58%）でスキーの男子が最も高い値を示した。
- ②競技別及び性別における記事のいずれにおいても面積と割合は、男性写真13555cm²（59%）でスキーの男子が最も高い値を示した。

- ③競技別及び性別における写真面積と割合は、男性写真5440cm²（55%）でスキーマの男子が最も高い値を示した。

文献

- (1) 粟木 一博ほか「バンクーバーオリンピックにおける日本選手団に関する新聞報道の動向について」『日本体育学会大会予稿集』第62号、2011年237頁
- (2) 清水 義浩「シドニーオリンピックにおけるハイビジョン中継」『映像情報メディア学会誌：映像情報メディア』第55巻、第2号、2001年199-202頁
- (3) 長野 健一郎「アトランタオリンピックハイビジョン中継システムについて：ハイビジョン新型中継車と番組伝送」『テレビジョン学会技術報告』第20巻、第48号、1996年、25-30頁
- (4) 中村 祐司「2008年北京オリンピック大会をめぐるガバナンス政策の特質-新聞報道を素材にして」『都宮大学国際学部研究論集』第26号、2008年、57-62頁
- (5) 飯田 貴子「ジェンダー視点から検証したアテネオリンピック期間中の新聞報道」『スポーツとジェンダー研究』第5号、2007年、31-44頁
- (6) 本間美和子ほか「1996アトランタオリンピック新聞報道から日本選手の弱さと課題を探る」『大学体育研究』第19号、1997年、25-45頁
- (7) 石塚 創也 はか「札幌オリンピック冬季競技大会における招致に関する新聞報道の検討—1960年から1966年における「北海道新聞」の記事分析を通して—」『日本体育学会大会予稿集』第63号、2012年、82頁
- (8) 飯田 貴子「シドニーオリンピックにおける新聞報道の分析」『日本体育学会大会号』第52号、2001年216頁